地歴公民(世界史)　慶應義塾大学　法学部　1/3

＜全体分析＞

試験時間　90 分

解答形式

マーク式・論述式

分量・難易（前年比較）

分量（減少・やや減少・変化なし・やや増加・$\boxed{\text{増加}}$）

難易（易化・やや易化・$\boxed{\text{変化なし}}$・やや難化・難化）

解答数は，マーク式が 40 問（内訳は，空欄補充 11 問，単答式 12 問，正誤 12 問，年代整序５問），論述式が２問（いずれも制限字数 300 字）。昨年度は，マーク式 50 問であったので，分量は大幅に増加したが，試験時間も 60 分から 90 分に増えたので，時間的に厳しいわけではないだろう。マーク式の難易度は昨年度と変化なく，今年度から新規に導入された論述問題も標準からやや難のレベルなので，全体として難易度は変化なしと判断した。

出題の特徴や昨年との変更点

今年度の最も大きな変更点は，本格的な論述問題が出題されたことである。事前のサンプル問題で 300 字程度の論述が出題されることは周知であったが，300 字の論述問題が２問も出題されるとは意外だったかもしれない。ただ，しっかり対策していた受験生は，何ら動揺しなかったはずだ。マーク式の語群は，例年通り五十音順となっている。例年，戦後（第二次世界大戦後）史・文化史から多く出題される傾向がある。昨年度は，正誤問題において，５つの選択肢のうち誤っているもの２つの組み合わせを選ぶ形式が新たに登場したが，今年度はそうした出題はなかった。

新課程を踏まえた出題

新科目の歴史総合を踏まえたと思われる問題が散見されたが，世界史の学習の知識を駆使すれば対応できるものも多かった。また，(73)（74）の「万国公法」は，歴史総合的ではあるが，従来，法学部の世界史では日本史の知識を絡めた細かい問題も出題されてきたので，世界史の問題として見ても違和感はない。一方で，新たに導入された論述問題は，新課程が重視する思考力・判断力・表現力を試す大学側の姿勢を強く見て取ることができる。

その他トピックス

特になし。

© 河合塾　2025 年

地歴公民(世界史)　慶應義塾大学　法学部　2/3

＜大問分析＞

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント（設問内容・答案作成上のポイントなど）	難易度
Ⅰ	マーク式	18 世紀後半～19 世紀後半のヨーロッパ史	(13)(14)（d）のボロディノの戦いは，ロシア遠征の際の戦いであるが，消去法も使えず，この戦いの時期がわからなければ正解できず厳しい。(23)(24)誤文が２つある。[02] フランス二月革命ではなくフランス七月革命と同じ 1830 年のフランスのアルジェリア侵略に危機感を抱いたオスマン帝国が，1835 年にトリポリ・キレナイカを直接支配下に置く。[04] アルジェリア独立は 1962 年で，セネガル・ベナン・マリ・モーリタニアは「アフリカの年」の 1960 年の独立。(29)(30) 他の選択肢が明らかに誤文なので，[02] を正文と判断せざるを得ないが，1861 年のイタリア王国成立をイタリア統一と記載する教科書はなく，教科書のように 1870 年の教皇領併合によって国家統一が実現すると理解している受験生は戸惑ったに違いない。(39)(40)（b）のシュレスヴィヒ・ホルシュタインの獲得の主語が不明で，消去法でも解けない問題なので，判断に迷うが，プロイセンが 1864 年のデンマーク戦争で獲得してオーストリアと共同管理した両地方を，1866 年のプロイセン＝オーストリア戦争の勝利で単独管理として編入したため，「獲得」は 1864 年のことと理解した。	やや難
Ⅱ	マーク式	国際連合の役割	(41)(42) のハマーショルド，(45)(46) のパラオは細かい。(57)(58) 誤文は細かい内容を含むが，正文を選ぶのは容易。(65)(66)（b）の難民の地位に関する条約の採択の時期は細かいが，（a）1979 年→（c）1985 年→（d）1991 年の順がわかれば，選択肢は２つに絞れる。(67)(68) 正文は細かいが，消去法で解答できる。[02] すべての国ではなく先進国。[03] 新人がベーリング海峡を通ったのは，約１万５千年前頃とされる。[04] 農奴解放が進んだ。(75)(76) 歴史総合の学習が必要な問題。世界史の学習のみでは，（e）1871 年→（b）1875 年の判断しかできず，選択肢を２つ消去できるだけである。（c）1895 年（日清戦争と同じ頃），（d）1905 年（日露戦争と同じ頃）がわかれば，（a）の時期が特定できなくても，選択肢は１つに絞れる。なお，（a）は 1876 年だが，1861 年に江戸幕府が日本領宣言をしているのでまぎらわしい。	やや難

© 河合塾　2025 年

Ⅲ	論述式	第二次世界大戦後の通貨体制	論述問題で求められる記述は，教科書に書かれている基本的な内容が中心なので，問題の要求を漏らさず答えていくことが重要である。本問の論点として「本制度の内容」が問われているが，その際に「その始期と終期を画した出来事とその背景に言及しつつ」とあることも忘れてはならない。以上から，「始期を画した出来事の背景」→「始期を画した出来事」→「本制度の内容」→「終期を画した出来事の背景」→「終期を画した出来事」の順で，それぞれ具体化していけばよい。法学部受験者なら，ブレトン＝ウッズ体制については丁寧に学習しているはずなので，内容的には取り組みやすかったと思われる。	標準
Ⅳ	論述式	宋（北宋）の統治体制	「本体制」が「宋（北宋）」の「中央集権的な中央・地方関係に基づく統治体制」であることを前提に，「本体制を導入するに至った背景」「本体制を支えた仕組みおよびそれにともなう問題」「本体制の構築によって北宋の地方統治にもたらされた唐末からの変化，ならびに対外関係への影響」の各要求に具体的に答えていく論述問題である。ただし，各要求の具体化に意識が向きすぎると，大前提である「中央集権的な中央・地方関係に基づく」の軸を見失いがちである。あくまで，「中央集権的な中央・地方関係」を意識しながら書かなければならない。内容的には，すべて教科書の記載で対応できるが，社会経済を含むので苦戦した受験生もいただろう。こうした政治・社会の転換点は，論述問題の頻出テーマなので，十分に対策しておきたい。	やや難

※難易度は５段階「易・やや易・標準・やや難・難」で，当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

＜学習対策＞

慶大法学部の入試問題では，戦後（第二次世界大戦後）史・文化史などがよく扱われる。今年度もそのような傾向が見られ，特に現代史からの出題が目立った。ほかの入試問題ではあまり見られない，いわゆる難問も出題される。対策としては，過去問研究に時間を割き，そのうえで重点をおくべき第二次世界大戦後の東西対立などに関する丁寧な学習を心がけたい。難問については，消去法も大きな武器となるだろう。さらに，今年度から法学部は，新科目の歴史総合と論述問題を世界史入試で採用した。歴史総合については，今年度は従来の世界史入試の範囲でも対応できるものが多かったが，来年度以降は未知数なので，教科書レベルの内容の対策は必要であろう。論述問題については，来年度以降も今年度のような本格的な論述問題が出題されることが想定されるので，早めに論述対策をしておくことが望ましい。

© 河合塾　2025 年